様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２１６０

研究課題名（和文）「東アジア共通の歴史認識」構築にむけた「感情交流」アプローチの応用研究

研究課題名（英文）"emotional interaction" approach toward common understanding of the history in east asia

研究代表者
張　宏波（Zhang, Hongbo）

明治学院大学・教養教育センター・准教授

研究者番号：００４４１１７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,600,000円、（間接経費）　780,000円

研究成果の概要（和文）：　感情交流アプローチの有効性を検討するうえで、戦争経験者にのべ20名以上、1950年代前半に日本人戦犯の教育にあたった中国人にのべ8名以上、その遺族など多くの関係者からも聴き取り調査を実施した。また、戦後世代の日本人、戦争責任について研究している中国側研究者などにも聴き取りや研究交流を実施した。
　こうした聴き取り調査を経て得られた知見として、感情を表出しながら経験を語ることをあえて促すことの重要性、事実や法の次元で不一致があっても感情次元での交流によって何が障害かは共有できるようになること、高齢で記憶が曖昧化しても感情を記録することは可能であり重要であること、などを見出した。

研究成果の概要（英文）：For examining the potentiality of "emotional interaction" approach, we have interviews with over 20 ex-Japanese soldiers and their bereaved family, more than 8 Chinese officers who educated Japanese war criminals in Fushun Camp at 1950's and their bereaved family, several postwar generations of Japanese citizen, and Chinese researchers who study war responsibilities.
 What we have learned from this research are that it's important to accept interviewees to express the depressed feelings; in spite of gap of the point of view on history and law of war, we can share to find what is obstacles between us by "emotional interaction"; it is important to keep a record of emotion on their own war memories even though they are so old that they recede from their mind.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：感情交流　歴史認識　聴き取り調査　東アジア　戦争加害　戦争被害　戦後和解　日中

１．研究開始当初の背景

本研究は、歴史学的な実証研究の徹底によって「客観的な歴史」が描かれたとしても、共通の歴史認識が生まれるとは限らないという限界を乗り越えることを企図している。とはいえ、実証的な歴史研究を否定するものでもなければ、それに全面的に代替することを企図しているわけでもない。

近年では、異なる歴史的背景をもつ研究者らによる共同研究も活発に行われており、劉傑・三谷博・楊大慶編『国境を越える歴史認識：日中対話の試み』（東京大学出版会、2006年）、三谷博・金泰昌編『東アジア歴史対話：国境と世代を越えて』（東京大学出版会、2007年）などの興味深い成果も著されている。また、共同体の集合記憶のあり方をめぐって哲学や政治学、社会学などの分野でも研究が盛んである。

にもかかわらず、とりわけ東アジアにおいて歴史観の相剋が深刻な問題となっていることを考えると、「共通の歴史事実」が「共通の歴史認識」に直ちに結びつくわけではないという側面を軽視することはできないと考えた。

２．研究の目的

「共通の歴史認識」を構築するためには、研究者も歴史的・社会的負荷を帯びた存在であるという制約を正面から見据えることが必要になる。つまり、異なる歴史観や歴史像に触れたときに感じる違和感や反発、あるいは自己の有する歴史認識の枠に収まらない事実や証言に接したときに生じる戸惑いや気後れといった感情の動きそのものを記述し、その意味を分析することから、自身の歴史認識を規定している基層を明らかにする作業がそれである。

その際、精神医学を専門とする野田正彰が文化人類学や社会学の方法論も取り入れながら進めてきた「感情交流アプローチ」に着目する。野田は、戦争の被害者および加害者に対する精神病理学的接近を通じて、彼らの精神に対する戦争経験の影響を明らかにした。とりわけ、日本人の戦争当事者において広く見られた感情の硬直化と、戦争を振り返ろうとしない日本社会の趨勢との関係性を分析してきた（『戦争と罪責』岩波書店 1998年；『虜囚の記憶』みすず書房 2009年）。

本研究では、この調査手法を歴史学をはじめとする人文社会科学へと応用する可能性について検討を行う。歴史学（中国人）、精神医学・文化人類学（日本人）、社会学・平和学（日本人）と出自も専門領域も異なる研究グループを組織し、各自の歴史認識とは異なる経験や立場に接触することで生じる我々の内面的変化を記述し、相互に分析し合うことで、我々の歴史認識がどのように形成されているのかを前景化させる「解釈学的」な手法を開発することが目的である。

３．研究の方法

強制連行や性暴力、虐殺など歴史認識が相剋する「事実」を明らかにする作業は、これまで主に２つの方法で行われてきた。第一に、歴史学的に事実を検証・究明する客観主義的な研究である。第二に、被害当事者による生々しい記録や、当事者へのインタビューに基づく証言集の編纂といった主観主義的な成果である。

こうした既存の研究成果の上に本研究も基礎づけられる一方で、それらと一線を画すのは、客観／主観のいずれかの観点から対象を扱うのではなく、“主観的”な証言に巻き込まれることで、われわれの持つ「客観的」歴史観がどのように変化したのかを研究対象とする点にある。

具体的には、戦争当事者などへの聴き取り調査および新しい史料の発掘などを行いながら、研究者の内面の変化を記述して相互に検討する機会を積み重ねていく。異質な経験や歴史観を有する調査対象者を選び、共通の歴史認識を構築するための感情交流の可能性を模索していく。

聴き取りはビデオで記録する。聴き取り調査や史料の解読を行った際には、必ず2人ないしは3人で相互検討会の機会を持ち、互いの感情や認識枠組みに関する分析を行う。また、対象者に分析結果をフィードバックし、さらなる感情交流を行う。

聴き取り対象としては、日本人元兵士の加害体験、東アジア諸国で被害者調査を中心とし、それまでに開発した調査手法を駆使して、中国河北省興隆県驢叫村での長期参与観察を実施する。

４．研究成果

(1)主な成果

感情交流アプローチの有効性を検討するうえで、戦争経験者（元日本軍兵士が中心）にのべ 20 名以上、1950 年代前半に日本人戦犯の教育にあたった中国人にのべ 8 名以上、その遺族など多くの関係者からも、聴き取り調査を実施することができた。いずれも当事者は 90 歳前後以上ときわめて高齢のため、彼らへの聴き取り調査を集中的に実施した。

また、戦争体験をどのように受け止めるかを模索している戦後世代の日本人、戦争責任について研究している中国側研究者などにも聴き取りや研究交流を複数実施することができた。研究代表者の本務校で調査内容について学生に還元し、学生の反応を記録する作業も各年度に複数回行った。

本研究では、聴き取った内容はもちろん、それを聴いた側の内面的変化について分析することが一つの柱であるため、毎回の聴き取りを終えた後、聴き取った側の内面的（無）変化や認識枠組みの揺らぎの有無について、それぞれ自己分析し、報告しあう機会をもった。その結果、被害／加害をまたぐ中日の研究者が同じ話を聴いて、異なる反応をする場

合もあれば、国籍の違いを超えた反応が現れる場合もあることが見えてきた。つまり、語り手が没感情的に戦争経験を語る場合には、聴き手側の感情や認識が揺らがずに前景化しやすい。ところが、語り手が戦争の反省を涙ながらに語ったり、あるいは悔しさを吐露しながら往時を回顧する場合には、聴き手側に認識や感情の違いがあっても一定の共感が生まれてくるのである。

違いを超越する共感が先立ってはじめて、違いについて論じる余地や可能性が生まれてくることを具体的に確認できたことが、第一の知見であった。

研究調査を進める過程で「領土問題」が焦点化され、歴史問題がクローズアップされるなかで聴き取りを行った。戦争経験者が現在の問題について語るときにも感情が高揚したり動揺したりして、戦時の感情経験を再現させていることが伝わってくる場面が見られた。戦争経験者にとって「現在」は過去の延長上にあり、現在世代としての調査者との感情交流分析をするうえで、領土問題はきわめて有益なテーマであった。

この点は中国側の調査対象者からの聴き取りでも確認でき、領土問題の解決のために必要とされる「共通の歴史認識」のためには、歴史事実や法的根拠の次元での共有が困難であるからこそ、感情の次元での交流を通じて問題の水準を了解しあうことの必要性が確認できたことが、第二の知見である。

また、90 歳を越える対象者たちは抑圧してきた感情が徐々に弛緩しつつあり、記憶は曖昧でも感情のあり方を記録することを通じて、戦争経験を捉え直すことが可能であると確認できた。この点も成果の一つと考えている。

最後に、遺族や戦後生まれの世代への聴き取りを通じて、被害や加害の実経験をベースにした感情を有する人々と、そうではない人々の感情のあり方の相違に迫ることができた。前者は、歴史事実をめぐる自身の「感情」の拠り所として実際の経験が参照される余地が大きい。後者はそうした経験的拠り所を有していないため、自身の認識や感情に素朴であると同時に、その妥当性に対する不安も潜在的に有しており、異なる歴史認識や感情に接することが自身の引き裂かれた状況を認識することに繋がることが一定程度確認できた。

(2)得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

「感情交流」アプローチの可能性を追求しているのは、連携研究者で精神医学者の野田正彰による独創的な研究以外には、内外ともにほとんど見られない。しかし、事実を明らかにする実証的な歴史研究の重要性とともにその限界も共有されつつある現在、歴史観や感情表出を異にする他者とどのように認識を共有させていくことができるかという問題意識は広まりつつある。中国側では実証研究によって戦争被害の実態を解明していくという課題が、その被害の甚大さを反映して遂行の途上にあるため、本研究で検討した方法論について即座に議論を開始するための土壌が整えられてはいない。

しかし、東アジアの歴史認識問題はますます混迷を深めているため、将来のオルタナティブな研究手法として国際的に共有していける地平を開いておく必要性を確認した。

(3)今後の展望

本研究では戦争体験者の超高齢化という現実に制約され、当事者への聴き取りを集中的に実施したが、それでも時間と費用が大きく不足し、計画の一部しか実施できなかった。

そこで、継続研究として、本研究の研究分担者が研究代表者となった別の挑戦的萌芽研究（「『感情交流』アプローチによる聴き取り調査の実施と語られざる戦争体験の収集」（課題番号 25580154）研究代表者：石田隆至、2013-14 年度）でも本課題を引き続き追究している。

また、ドイツや北アイルランドでの和解の経験について現地調査し、東アジアにおける歴史認識の共有に関する本調査結果との比較研究を行う予定であったが、費用上、時間上の制約から実施できなかった。今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　6　件）

① 張宏波、石田隆至、金侖貞、藤田秀雄「東北アジアの和解のために何が求められているか」『月刊社会教育』（査読無）691 号、2013、pp.16-23。

② 石田隆至、張宏波「加害の語りと戦後日本社会(4)：戦争を推進した社会の転換へむけて（上）－山陰支部における『相互援助』を中心に－」『戦争責任研究』（査読有）76 号、2012、pp.67-78。

③ 石田隆至、張宏波「加害の語りと戦後日本社会(5)：戦争を推進した社会の転換へむけて（下）－「相互援助」が可能にした「加害証言」－」（査読有）78 号、2012、pp.63-74。

④ 石田隆至、張宏波「加害の語りと戦後日本社会(3)「棄兵」たちの戦後史(下)－「加害者」である「被害者」として」『戦争責任研究』（査読有）75 号、2012、pp.67-78。

⑤ 石田隆至、張宏波「加害の語りと戦後日本社会(2)「棄兵」たちの戦後史(上)－「認罪」経験の二つの捉え方」『戦争責任研究』（査読有）73 号、2011、pp.48-59。

⑥ 石田隆至、張宏波「加害の語りと戦後日本社会(1)「洗脳」言説を超えて加害認識を伝える－戦犯作家・平野零児の語りを通じて」『戦争責任研究』（査読有）72 号、2011、pp.48-58。

〔学会発表〕（計　3　件）
①　張宏波「従“中帰連”初期組織観形成看其対中国“寛大政策”的受容」、東北地区中日関係史研究会 2013 年度大会、2013.8.7、中国撫順市。
②　張宏波「偽満州国国民動員体制下的基督教伝教初探――以“熱河伝教”与“協和会”之関係為中心――」、抗戦時期都市民衆日常生活国際学術検討会、2012.12.1、南京師範大学。
③　石田隆至「戦争時期基督教主義学校的“抵抗”与“合作”――以明治学院為例――」、抗戦時期都市民衆日常生活国際学術検討会、2012.12.1、南京師範大学。

〔図書〕（計　3　件）
①　野添憲治編、社会評論社、『花岡を忘れるな・耿諄の生涯――中国人強制連行と日本の戦後責任』2014、pp.240-265
②　渡辺祐子・張宏波・荒井英子、いのちのことば社、『日本の植民地支配と「熱河宣教」』2011、pp.52-80。

６．研究組織
(1)研究代表者
張　宏波（ZHANG, hongbo）
明治学院大学・教養教育センター・准教授
研究者番号：00441171

(2)研究分担者
石田　隆至（ISHIDA, Ryuji）
明治学院大学・国際平和研究所・研究員
研究者番号：10617517

(3)連携研究者
野田　正彰（NODA, Masaaki）
関西学院大学・学長室・教授
研究者番号：80112548